

アメリカの高校生はどのように日本語を学ぶのか

高場 政晃

1. アメリカの高校で日本語を教える

アメリカの現地高校で、指導助手として日本語を教えるチャンスに恵まれた。

2016年4月から2017年3月まで、兵庫県から姉妹州の米国ワシントン州に派遣された。勤務先はシアトル郊外のマカティオ市の Kamiak High School。全校生徒2,000人、閑静な住宅地に建ついわゆる進学校に配置された。

2. カリキュラムはどう違うのか

学区により異なるが、勤務校の学区では必修外国語は高校からだった。小学校が5年制であったため、日本でいう中学3年生の年齢から外国語を学ぶことになる。生徒はスペイン語・フランス語・ドイツ語・日本語の中から1つ選択し、2年間学習することが求められる。高校での外国語クラスは、日本語1～3の上に Advanced Placement (AP) クラスという大学レベルの授業がある。

中学3年生からとスタートが遅く感じるが、思ったより生徒たちは日本語が上手だった。ひらがなや漢字を書くことには苦勞していたが、話すことについては平均的な日本の英語学習者よりも上手であるように感じた。

その理由としては、アメリカ人はコミュニケーションが上手だからという部分や、自分で選択しているということも大きいだろうが、それ以外に実際に授業で話すようになっているからだ。なぜかというところというテストであるからだ。

3. テストはどう違うのか

アメリカには大学入試センター試験ほど大規模な共通試験はない。数学などでは統一試験のようなものはあるが、外国語においては主要なものではなく、共通の指針といえば、前述の AP クラスレベルの内容が出題される AP テストというものがある。ここのスコ

アが大学進学後の単位習得に関わることになる。試験は各高校のコンピュータールームで一斉に実施される。

この高校生の日本語最高レベルの AP テストが非常に優れている。内容は、聞く・話す・読む・書く、の4技能がすべて入っていて、とても実用であった。何とんでもスピーキングがあることが素晴らしい。テストに「話す」があるので、授業でも自然とその練習をしている。方法は面談式ではなく、コンピュータに向かって話す方式であった。

リーディングもメールの読み取りなど実用的な内容で、いわゆる文法問題ではなく、当然翻訳の問題もない。生徒の母語が様々なアメリカにおいて翻訳の問題を出すことはそもそも実用的ではない。日本に関する文化比較のプレゼンテーションやメールの読み取りなど、できるようになっておく必要がある内容なので、よい波及効果がある。

ライティングも紙と鉛筆ではなく、タイピングによって行われていた。手書きすることのほうが少ない世の中、理に適っているし、発達上の問題がある生徒も救われる。字の上手下手という要素も省け、採点も容易である。

こういったテストはもちろん日本語だけでなく、他の外国語も同様にある。言語によってテストのレベルには多少差があるが、どれもスピーキングやライティングは当然含まれている。

このテストの存在を知ったときは本当に感動した。よいテストは授業や生徒をよりよい方向に導いていくことを実感した。まさに昨今議論されている日本の大学入試改革も、この部分を変えようとしているのである。

4. コミュニケーションのとらえ方はどう違うのか

そのようなテストになった背景は、全米外国語教育協会 ACTFL (American Council on the Teaching of Foreign Languages) の考え方が大きいようであ

る。アメリカは州ごとに教育目標などすべて違い、全国統一学習指導要領のようなものはなく、学会その他では全米的な指針として ACTFL のものが参照される。ACTFL は、コミュニケーションモードを interpersonal, presentational, interpretive という 3 つの尺度に分けている。私たちのいう 4 技能は、概ね以下のように各尺度に当てはまる。

interpersonal(対人) : speaking / writing

presentational(提示) : speaking / writing

interpretive(解釈) : listening / reading

この分け方がとてもわかりやすく感じた。聞く・話す・読む・書くという 4 技能は、それぞれ切り離されているものではなく、それぞれ目的があって行っているもの。たとえば話すことでも、会話としてのスピーキングとスピーチとしてのスピーキングは全くモードが違う。

スピーチは、エッセイを書く技能と同じモード(一方通行)。会話は、SNS 上でチャットをやるのと同じ(インタラクティブ)。いくらスピーチを練習しても会話ができるようにならないのは当然で、会話ができるようになるには会話の練習をしなければならぬという当たり前のことに気づいた。

改定される学習指導要領でも「話すこと」は「やりとり」[発表]と区別されており、方向性は同じだ。やはり米国の日本語教育から日本の英語教育が学べる点は多いように感じた。

5. 教科書はどう違うのか

勤務校の日本語授業は、教科書とワークブックを用いてオーソドックスな授業の中にコミュニケーション練習を入れていた。ただ、日本語教科書は、会話を促進する意味でとても優れていた。

日本の高校で扱うコミュニケーション英語の教科書は、特別に設定された会話練習のページ以外の本文は、基本的に説明文や物語文である。しかし日本語の教科書は、いわゆる本文が基本的に会話の形になっているものがほとんどで、普通に扱えば 4 技能の練習になっている。

これは前述したテストの影響が多分にある。テストに合わせて教科書がデザインされていた。

6. 授業はどう違うのか

勤務校においては、AP テストに向けた授業シラ

バスとなっていた。教科書に沿って勉強した後、パフォーマンステストとして interpersonal(対人)と presentational(提示)それぞれにおいて、スピーキングとライティングテストがあった。

対人型としては、スピーキングにおいては会話、ライティングでは SNS 上などでみられるいわゆる「チャット」などが考えられる。提示型は、スピーキングではスピーチ、ライティングではエッセイである。「日本の学校」「日本の食べ物」などそれぞれのテーマにおいて、この 4 つの内容をテストしていた。ただ、どれも提示型を最後に行っていた。

スピーキングにおいては、会話テストを行い、先生の質問部分をのぞいて生徒の発話だけの状態にすれば自動的にスピーチが完成するようになる。ライティングでも、先に文字での「チャット」を行い、それをつなげればエッセイができるようになる。

このようにして、同じトピックを 4 回繰り返すことで、生徒は最終的に自信をもって発表できる。

7. 英語の授業にどう生かすのか

帰国後、これまで通り英語の授業を受け持っている。授業に生かしたことを 1 つ紹介する。日本では週 1 時間、ALT とのチームティーチングの時間があり、年間数回スピーキングテストをやっていた。ここで、対人型と提示型を意識して指導しテストするようになった。

これまでであれば、1) スピーチ原稿を書く → 2) 覚えて発表、であったが、その間に対人活動を入れるようにした。生徒に 5 文程度の短いスピーチを課す前に ALT と 1 対 1 の会話テストを入れるようにした。ALT の質問に答えれば、スピーチが完成するようになっている。

段階としては、1) 質問を書いたワークシートを完成する、2) ALT と会話テスト、3) 1) の内容をつなぎ合わせてスピーチ原稿を完成する、4) スピーチ発表、という手順である。

たったこれだけのことで、生徒にとっては ALT に通じたという経験が、クラスの前で自信をもって発表するという意欲につながっていた。

日本語教育から多くを学び、また自分の経験を現地にも発信できた、充実した 1 年であった。

(兵庫県立明石高等学校 教諭)